

神に賞賛される生き方

「物の見方」～罪を知ること、そこに福音が～

I テモテ 1 : 5 ~ 17

私たちは、物の味方、そしてどのように信仰の眼差しによって人生を見ていくかを多くの先人たちの人生を通して学んでいます。私たちには、人それぞれの見方があります。その見方で意味が大きく変わってしまいます。ですから、私たちが見ているその見方を正しくすれば、その物事に隠されている、本来神さまが私たちに教えた事実を知ることが出来ます。ですから、もう一度私たちは見方の誤りを直していきたいと思います。

■ 律法とは「愛」が目標

パウロは律法について細かく伝えています。律法とは、そもそも何なのでしょう。「してはならない」という命令、法律という見方をします。私たちは善人であるというその評価基準として法律を適用するわけです。しかし、本来の聖書が人間に与えた律法はそういう理由だったのでしょうか？律法は、「この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています (I テモテ 1:5)」とあるように、「愛」を目標としています。さらにパウロは、この「愛」について説明します (6・7 節)。この箇所を通して愛が失われていることに問題があるのだと教えています。律法とは何なのか？それは、私たちが罪人であることを教えるためのものです。本来の目標を見失い、自分たちが善人であることを示すために法律を適用するという本末転倒なことをすると、どれだけ教えが素晴らしくても全く意味がないのです。

■ 律法は「自分が罪人である」ことを認識させる

私たちは、律法は次の事 (8-10 節) を知って正しく用いるなら良いものだと知っています。この箇所には、あらゆる罪人が出てきますがみんな同じ罪人だと言っているのです。「私はそこまで罪を犯していない」と思う人がいるかもしれません。ここで「姦淫の女」(ヨハネ 8:1-11) の話を思い出してください。罪を犯した女を前に律法学者やパリサイ人たちは「モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか (8:5)」と、律法を用いてイエスさまを陥れようとしていました。しかし、イエスさまは「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい (8:7)」と言い、結果、「彼らは年寄から始めて、ひとりひとり出て行き、ついに、イエスだけになり、女は中にいたまま残された (8:9)」とあります。そして最後にイエスさまは「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように (8:11)」と言ったのです。パウロは、律法は「私たちが罪人である」ことを教えるためだけにあることが伝えたかったのです。そして、その律法は「祝福に満ちた神の、栄光の福音 (11 節)」つまり、律法 = 福音だと言っているのです。「自分が罪人であることを教え、この罪人である私たちのために命をかけて死んでくれた人がいて、その人は死から甦り、今はわたしたちのために執り成して祈ってくれていて、私たちが祝福された人生を歩むことが出来るように、また、この命がけの愛を伝えていくことが出来るように、共に歩む」というのが福音です。ですから、福音の原点は律法であって、律法の見方を間違えると人の裁く道具となり、自分を被害者にするという、呪いの律法になってしまうのです。

■ 律法はイエスさまが自分のために十字架に架かって死んだ…その原点を教えるもの

そしてパウロは、13-15 節のように言っています。パウロはイエスさまに出会うまでは「自分は律法の専門家で律法においては非の打ち所がない」と言うほど全く違う価値観でしたが「私はそ

の罪人のかしらです」と自分の罪を認めたのです。罪を知らずに律法によって人を裁いて自分が正しいと思うことは罪です。また、律法を用いて自分を卑下することも罪です。なぜなら、イエスキリストの十字架の死はこれらのことで全て無効になってしまうからです。律法はただただこのような私たちの罪を赦すためにイエスキリストが犠牲になって死んだその罪の原点が何なのかを教えているのです。9-10 節に書かれているような罪人は私たちではありませんか？この私たちの罪を教えるために、イエスさまは「救いをもたらすために救い主 (キリスト・イエス)」として来られ、十字架にかかれたのです。私たちには、過去に確かに苦しみ・失敗などがありました。自分の存在意義・存在理由も分からなくなっていました。こんな私たちを、この世に遣わしたのは神さまです。私たちを人々の見本にしようと、まず私たちに、この上ない寛容な心で愛を示してくださいました。

■ 祈りに応えてくださる主。見方を変えて諦めない

アポロ 13 号を知っていますか？アポロ 13 号は、アメリカ合衆国のアポロ計画の 3 度目の有人月飛行で話題にもなっていませんでした。乗組員はジェームズ船長、ジョン司令船操縦士、フレッド月着陸船操縦士の 3 人で、彼らは熱心なクリスチャンでした。しかし、途中で事故によりミッション中止を余儀なくされながらも、その後に見舞われた数多くの深刻な危機的状況を脱し、乗組員全員が無事に地球へ帰還したのです。月面着陸を目前に宇宙をさまよいつづけた 3 人は、I コリント 13 章を読んで「神は真実な方ですから、試練と共に必ず脱出の道を備えてくれている」と祈り合ったそうです。そしてこの局面を「神さまの計画だ。私たちが選ばれたのには意味がある」と、信仰の土台に立って見方を変えて患難に立ち向かいました。地球にいる彼らの家族も同様でした。諦めないで「必ず夫は帰ってくる」と信仰によって祈り続けました。結果、彼らは月面着陸ができませんでしたが、あらゆる困難を乗り越え無事地球に帰還したのです。彼らは後に「成功した失敗」「栄光ある失敗」と讃えられる素晴らしい歴史を残すのです。

■ イエスさまの恵みは今も注がれている

イエスさまが私たちに残した恵みは、私たちの涙・憂いを喜びに変えるものであると聖書に書かれています。一時は悲しみがありますが、その後には必ず喜びがあるのだと福音にあるのです。しかし、私たちは愚かさゆえにこの福音を間違えて理解し、自分の正しさを証明する道具として用いてしまっていないでしょうか。イエスさまはこんな私たちを愛し赦してくださいました。私たちが人々の見本になるように私たちに寛容を示してくださいました。赦されたこと・愛されていることに感謝し、律法を通して罪を認めて悔い改め、この行為が神の前に祈りとして積み上げられていきますよう、見方を変えて諦めずに祈り続けましょう。

(要約者:行司佳世伝道師)

(2022年 2月 27日)